

【審査論文】

世界解釈、世界構築としての建築の図的表現 J. -N. -L. デュランの『比較建築図集』と『建築講義要録』から

小澤京子

Architectural Image as a Means of Classification, Heuristics and Design: from J.-N.-L. Durand's *Recueil et parallèle des édifices and Précis des leçons d'architecture*

Kyoko OZAWA

要旨

In France, from the age of Enlightenment to the early 19th century, scientific-technical images and their graphical arrangements became a device for recognizing, describing, and thinking about the world. Along with the illustrated plates and image tableaux in scientific books, dictionaries, and encyclopedias, architectural imagery came to function as a means of classification, comparison, description of history, and designing buildings. It was during this period that a turn occurred in architectural theory: a shift from the neo-classical concept of architectural character to the rationalist or eclecticist notion of building types.

Two architectural treatises by Jean-Nicolas-Louis Durand, *Recueil et parallèle des édifices de tout genre*... (1799–1801) and *Précis des leçons d'architecture*... (1802–1805), marked a characteristic point in this turn. In *Recueil*, a juxtaposition of the buildings from various ages and areas in a tableau enabled a typology based on the comparison of formal structures by freeing architecture from the historical and regional contexts and from aesthetic judgment. In *Précis*, arranging several architectural elements on a grid provides an algorithm of designing buildings for the architects as engineers, not as artists.

This essay clarifies the peculiarity and the significance of Durand's graphical system in the context of intellectual history.

キーワード：建築計画・Architectural control、建築史・Architectural history、建築理論・Architectural theory、建築の図的表現・Architectural drawing、類型学／タイポロジー・Typology

序論

テキストと並んで図解が世界の認識と思考のための道具となる啓蒙主義時代から、タブロー (tableau) の語が科学技術分野での「図解」を意味するようになる19世紀前半にかけてのフランス¹では、建築分野における図面や図表表現もまた、世界や歴史を把握・解釈・分類し(再)構築するための媒体・手段としての機能を担うようになる。この時代は建築史においても重要な転換期であり、建築の「性格／特徴(仏

語caractère；英語character）」という概念が注目された新古典主義時代から、建築の発展史や比較史において、ビルディング・タイプという発想とその図示が盛んとなる「歴史主義」の時代への移行期に相当する。

このような潮流において転回点となる特徴的な事例が、フランスの建築家ジャン＝ニコラ＝ルイ・デュラン（1760-1834年）による図版入り建築書『比較建築図集（*Recueil et parallèle des édifices de tout genre*…）』（全2巻、1799・1801年）と『建築講義要録（*Précis des leçons d'architecture*…）』（全2巻、初版1802・1805年）である。『比較建築図集』は、古今東西の建築物を同一の縮尺で並置した「タブロー（一覧表）」という図的表現を採用することで、建築物を固有の歴史や土地の文脈から引き剥がし、美的な価値判断からも解放して、視覚的・形式的な類型（type）を抽出することを可能とした。さらに『建築講義要録』では、均質な基底面上のグリッドに建築物の各要素を並置したタブローと、それに基づく建築の類型学（typologie）が、従来の建築史記述の方法論ではなく、技術者が設計を行う際のアルゴリズムとして提示される。

デュランが建築書の図版において採用したグリッド方式が、視覚的形式の相互比較を可能とし、さらに建築設計の手法を刷新し、それが芸術家から技術者へと時代の変化と共振していたことは、すでに先行研究の多くが指摘してきた。しかし、それらはおしなべて建築史ないし建築理論史における「類型学（タイポロジー）」に焦点を当てたものである。18世紀後半から19世紀前半にかけて図版や図面・図表一般が、テキストに体现された思考の単なる「説明＝図示（illustration）」に留まらず、描くことを通して、また図の創造的読解を通して、発見的な思考を導く媒体や手段でもあったことへの目配せが、そこからは脱落している。

本稿は、デュランによる二つの建築書を中心に、建築図面・図表が有する「創造的解釈や発見的思考を導く図的表現」という性質を分析し、啓蒙主義時代から19世紀に至る時代の建築図面が有する思想史的意義の、インテレクチュアル・ヒストリー「知性の歴史」における位置づけを明確にするものである。これは建築の図的表現と知性・認識の歴史をめぐる包括的研究の一部を為すものであり、その基底には、図面や図表を通じた思考によって、建築史への態度（建築の歴史をどのように捉え、語るのか）はいかに規定され、変容するのかという問いがある。

1. 先行研究の検討と建築の図的表現におけるデュランの位置づけ

1.1. 先行研究によるデュランの位置づけ

ここでは、本稿のテーマである「世界の解釈と創造の手段としての建築の図的表現」に絞って検討したい。建築の類型学一般についての考察は、1960年代に盛んとなった。例えばカルロ・アニモニオーノやアルド・ロッシらは、ヴェネツィア建築大学における講義で「建築類型学（la tipologia edilizia）」という概念を提示している。G.C. アルガンは1965年の書物『計画と運命（*Progetto e destino*）』内で、「建築類型学」という概念を、デュランと同時代の建築史家A.C. カトルメール・ド・カンシーの「類（type）」概念の解釈から考察している。デュランの建築物分類に焦点を当てたのは、R.モネオである。彼は建築批評雑誌『Oppositions』寄稿の論文「類型学について」（1978年）で、デュランは従来の建築物の「類型」の定義を変容させたと分析する²。すなわち、デュランによって類型学は単に建築物を「記述」するための手段に留まらず、分類された要素の配列によって「創造」を可能とする方法論に変容したというのである³。さらに、1980年代にデュランの網羅的なモノグラフィーを著したW. サンビアンは、『比較建築図集』と『建築講義要録』がもたらした革新を、建築の類型学の導入による設計プロセスの標準化と規定している。

すでに先行研究が明らかにしたデュランの建築史上の位置づけは、概括すれば以下のようなになるのである

う。デュラン自身も『建築講義要録』序論で明確に宣言する通り、彼が編み出した「建築の類型学」とグリッド・システムを用いた設計術は、芸術から工学技術へと、建築術の性質を転回させるものであった(それに伴い、建築家も芸術家から技術者・技術官僚へと変質してゆくことになる)。これは、フランスにおける建築教育や建築理論の母体が、建築アカデミーからエコール・ポリテクニク(理工科学校)⁴へとシフトしていく過程と重なる。この背景には、フランス革命を経て、建築が宗教権力や王権から離れ、国家の政策へと組み込まれたという体制の大きな変化もある⁵。さらには、建築における「モデルの模倣」という発想を否定し⁶、建築を最小単位としての「部分」にまで分解し、その組み合わせによって新たな建築物を構想するというデュランの設計手法は、芸術の規範が「模倣」からロマン主義的な「独創的創造」へと移行を見せた時代背景とも、一部においては重なっている。一部においては、という留保が必要なのは、デュランによる「部分の組み合わせ」は機械設計的な発想であり、ロマン主義とはその点で異なるからである。

1.2. デュランへと至る流れ——図版による建築の比較史

啓蒙主義時代のフランスでは、建築の形態と分類をめぐる言説が、類似関係に基づくものから、体系的な分類を志向するものへと、次第にしかしラディカルに変移していく。具体的には、18世紀半ばから19世紀初頭のフランスで執筆・刊行された建築書(J.F.ブロンデル、ブレ、ルドゥ、カトルメール・ド・カンシー、J. N. L.デュラン)の言説と図面である。この移行は、自然史におけるアナロジーから分類学へとという動向とも一致する。

この時代の自然史や生理学の動向は、17世紀のル・ブランからラヴァーターやカンペルを経て、キュビエやサン=ティレールの比較解剖学へと変質しつつも受け継がれていく観相学・骨相学的な発想と、リンネによる体系的分類の完成に概括できる。当時の建築理論と自然史をつなぐのが「性格/特徴」という語であり、これは「目に見える外観上の特徴」と、より内在的な機能や抽象的な分類とを結びつける概念であった。またこの概念は、事物の外観の「可読性」を基に体系化と分類を試みる発想に支えられており、これは同時代の事典編纂や普遍言語探求の思潮とも共通したものであった。

ニコラ=フランソワ・ブロンデル(1618-1686年)による『王立建築アカデミー建築講義』(1675年)は、建築の一要素のみを取り出し、同一図版内に並置して比較可能とした最初期の例である【図1】。新古典主義の時代になると、建築史家のジュリアン=ダヴィッド・ル・ロワ(1724-1803年)が『コンスタンティヌス大帝の治世から今日までのキリスト教徒による神殿の配置と様々な形態の歴史』(1764年)を刊行し、形態と構造の「発展史」という観点から歴史を捉えるために、共通の機能をもつ異なる時代の建築物の相互比較を行った【図2】。ここでは古今の建築物が年代順に並置されているが、縮尺は不統一のままである。サンビアンはこれを古今の建築物の「図的な比較」と規定し、シャルル・ペロー『古代人と現代人の比較(parallèle)』(1688-97年)によりフランスに導入された「文学的な比較」と対照させている⁷。さらにジャック=フランソワ・ブロンデル(1705-1774年)の『建築講義』第2巻(1771年)に至り、建築書は建築タイプ別の構成を採るようになる【図3】。N.ペヴスナーは、デュランによる建築の類型学は、このブロンデルの系譜を引くものであると言う⁸。『百科全書』の建築関連項目の執筆者として知られるブロンデルは、建築を講ずる私塾を開講しており、デュランの師に当たるブレの指導者でもあった。

さらに、「比較(parallèle)」という語も含めてデュランに直接影響を与えたのは、マリ=ジョセフ・ペイル(1730-1785年)による建築表現である。彼の死後に出版された『ペイル建築作品』第2版(1795年)の例えば「古代の神殿と現代の教会の比較(*Parallèle des temples des anciens avec les églises*)

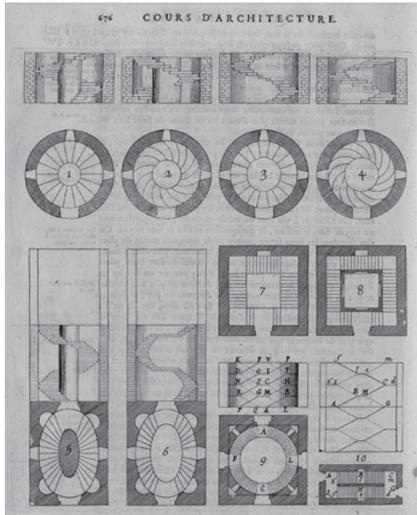


図 1

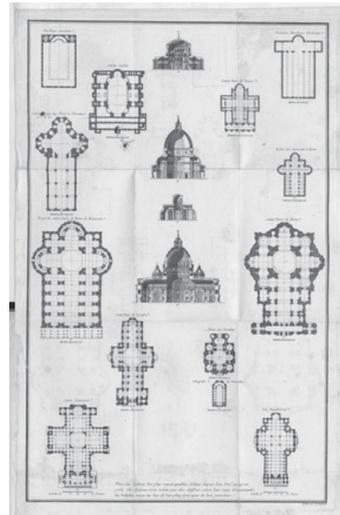


図 2

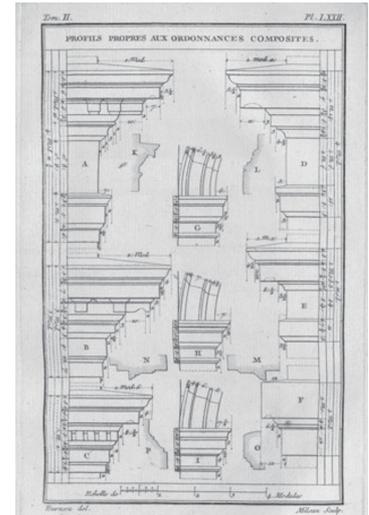


図 3

【図 1】 N.-F. ブロンデル「階段についてのパルディオの教義」、『王立建築アカデミー建築講義』1675年

【図 2】 ル・ロワ『…神廟の配置と様々な形態の歴史』1764年、巻末収録図版。下部のキャプションには以下の内容が記されている。「白眉の教会の平面図、326年から1764年までに建造されたもの。これらの教会の傍には、その古さのランクに応じた数字が付されている。平面図の下の目盛は、大きさの判断に資するものである」。

【図 3】 J.-F. ブロンデル (1705-1774)『建築講義』第2巻、1771年より柱頭の比較図

modernes)】【図 4】では、上段にユピテル=スタトルの神殿（紀元前2世紀）、マルス・ウルトルの神殿（紀元前1世紀）、ネロ帝のファサード、ローマのパンテオン（紀元2世紀）、アントニヌス・ピウスとファウステイナ神殿（紀元2世紀）が、下段にはソルボンヌの中庭内部のポーチ（14/17世紀）、聖母被昇天教会のポーチ（17世紀）、サン・シュルピス教会のポルタイユ（18世紀）、パンテオンのポーチ（18世紀）、外科学校の階段教室のポーチ（18世紀）が並べられ、共通する機能をもつ建築物（神殿・教会）の通史的な比較が可能となっている。

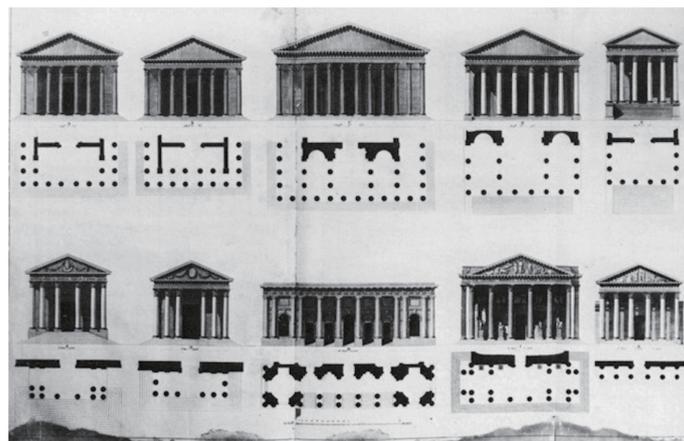


図 4 ペイル「古代の神殿と現代の教会の比較」、『建築作品』第2版、1795年

2. デュランと二つの建築書

ジャン=ニコラ=ルイ・デュランは、エティエンヌ=ルイ・ブレ（1728-1799年）のアトリエで製図工として働いた後、エコール・ポリテクニーク（以下ポリテクと略記）にて1799年から1834年の長期にわたり建築概論の講義を担当する。デュランによる建築に関する著作・教本には2点がある。一つは『古代

と現代のあらゆる分野の建築物の集成と比較対照、美しさ、壮大さ、独自性で傑出したものを同一の縮尺で描画(以下『比較建築図集』と略称)』(全2巻、1799・1801年)であり、もう一つはポリテクでの講義に基づいた『エコール・ポリテクニーク建築講義要録(以下『建築講義要録』と略称)』(初版1802・05年)である。この2著が建築の図的表現にいかなる革新をもたらし、さらには図的表現を媒体とした思考のあり方にどのような転回をもたらしたのか、順に検討していく。

2.1. 『比較建築図集』

92枚の図版を収録した『比較建築図集』【図5】は、デュランが特徴的とみなした古今東西の建築物を一枚の図表上^{タブロー}に配置し、相互の形態の比較を行うものである。ここには、建築物の視覚的形式や要素に着目したうえで、複数のものを同一平面上に並置し、「比較」を行うという発想の成立を見てとることができる。この書はデュランにとって思考のための基礎であり、建築の原理と方法論を導き出すためのものであった。本書では建築物はそれぞれが根ざす土地や環境とその固有の文脈から引き剥がされ、一枚の平面上に取り集められて、同一の縮尺で並置されることとなる。書題にも「同一の縮尺で描画(dessinés sur une même Echelle)」とあるが、これは当時革新的な表現方法だった。デュラン自身が序文で、これまでの建築書の図版が、考察すべき建築と凡庸な建築を区別せずに掲載し、また同一ジャンルの建築物が複数ある巻の随所に分散していること、図版ごとに縮尺が異なることを批判し、建築図の相互比較が、建築についての判断や推論を可能にする唯一の作業であると説いている。「[本書は] 建築の包括的かつ廉価な図表(tableau)を芸術家たちに提供することができるだろう。[...] とりわけ、建築物と記念建造物がジャンル(genres)によって分類され、類似(analogie)の程度に応じて関連づけられ、同一の縮尺に従って提示されるときには、これが私の企図である⁹⁾」とデュランは言う。



図5 デュラン『比較建築図集』タイトルページ、1799年(中央部分に序文を掲載)

『比較建築図集』の際立った特徴を挙げるならば、以下のようなになる。まずは建築の「ジャンル」¹⁰⁾毎に代表作を一つ取り上げるという基準であり、重要な作例であっても類似例は掲載しない、凡庸であってもジャンル内で現存する唯一の作例ならば取り上げるという判断がなされている。ここには、個々の建築物に対する価値づけの軽重(「名作」といったような)ではなく、建築の各ジャンルこそが重要であるという発想がある。取り上げられている建築物の類型は、異教の古代神殿、モスク、パゴダ、様々な時代のキリスト教教会、古代ローマの集会場・広場・卸売市場・市場・バザール、市庁舎、裁判所、闘技場、寄宿

学校、図書館、柱廊、証券取引所、墳墓、橋・水道橋、兵舎、監獄、病院、浴場、劇場、住宅、宮殿などである。建築物の分類（工場、銀行、証券取引所…といったいわゆるビルディング・タイプ）という発想じたいは、フランス革命以前から存在していた。例えば、革命以前より構想されていたルドゥによる建築書『芸術、慣習、法制との関係の下に考察された建築』（刊行1804年）やその『趣意書』（1802年）でも、ビルディング・タイプ別の列挙がなされている。デュランの独自性（それは後の時代の趨勢を形づくることとなる）は、彼の「建築の類型学」が、対象となる建築物を歴史と土地の文脈から引き剥がし、同一縮尺の下に（つまり完全に等価な存在として）「^{タブロー}図表」としての同一平面上に並べ置き一覧を可能にするという、建築の図的表現における革新的な方法論によってもたらされた点にある【図6】。類型化した結果を分かりやすく説明するための図示ではなく、むしろ図的表現により相互比較が可能となることで、類型が抽出されるのである。

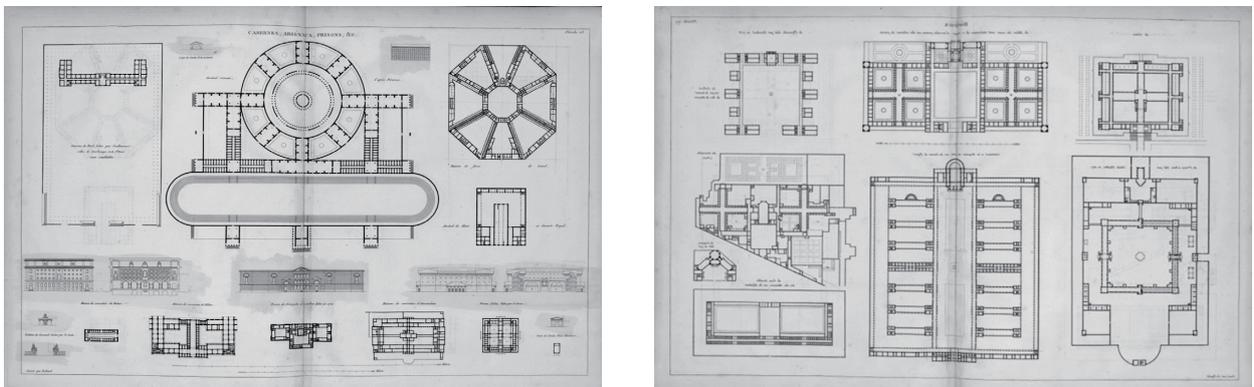


図6 デュラン『比較建築図集』より「兵舎、兵器庫、監獄など」（左）と「病院」（右）

2.2. 『建築講義要録』

『比較建築図集』で提示された^{タブロー}図表による類型学から、さらに建築設計手法を引き出したのが、『建築講義要録』（全2巻、初版1802・1805年）である。この講義要録に関しては、初版刊行後も複数回にわたって改訂版や重版が刊行されている¹¹。まず1813年に、第1巻につきデュラン自身が多くの改訂を施した『新版建築講義要録（Nouveau Précis ...）』が出版された¹²。その後も1817・19年、1823・25、および1840年（デュランの死後）に重版が刊行されている。本稿では基本的に、第1巻についてはデュラン自身が加筆修正を施した1813年の『新版建築講義要録（Nouveau Précis ...）』に、第2巻については、その後の重版でもページ数を除いては大幅な変更が無いため、1805年の初版に準拠する。

デュラン自身が「建築の真の原理」を提示するものと宣言した本書は、単純化した形態を左右対称に配置しており、グリッド・プラン（方軸設計）の先駆をなすものである【図7】。

本書でデュランは建築の目的を「公的・私的な有用性（utilité）」と「個人と社会の幸福（bonheur）と保全」と規定し¹³、さらに「配列（disposition）」を「建築の唯一の対象」に据える¹⁴。彼は第1巻の冒頭近くで建築を公的建造物と私的建造物の二つの「ジャンル」に分け、それぞれの代表例を列挙する¹⁵。さらに第2巻では、このジャンルに基づきつつ、最小単位まで分解された要素の再結合によって建築物を設計する方法論を詳述している。そこでいわば建築的思考の基底材となるのが、^{タブロー}一覧表形式の図である。デュラン自身、図面は考えを理解しさらには固定する効用があると明言している。

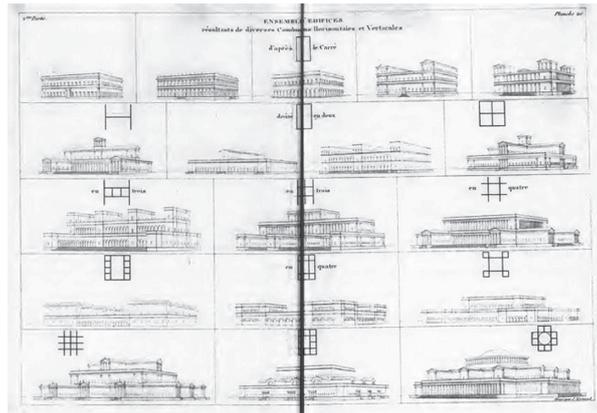


図7 デュラン「建築物の集合」、『新版建築講義要録』1813年

図面は建築を学んだり計画案を作成する際に、その考えを理解し、納得するのに役立ち、必要なら十分時間をかけて改めて構想を検討したり修正できるように、その考えを固定するのに役立つ。そしてさらに図面は、監督者あるいは建物の建設に協同している様々な業者に考えを伝えるのに役立つ。¹⁶

さらに第2巻では「主要なジャンルの建築物の検討」がなされる。建築物の諸類型（神殿、宮殿、公庫、裁判所、公共住宅、学院、学者の集会用建物、図書館、博物館、劇場、証券取引所、浴場、病院、監獄、兵舎、個人邸宅……）を列挙した後に、デュランは、相互にフラットで選択可能な要素の組み合わせによって建築物の構成（composition）を行うべきことを説く。グリッド状の平面に配置されることで、建築物は各部分（partie）へと分解され、それが新たな配列（disposition）へと導かれるというのである¹⁷【図8】。

[...] 以上のように、この建物の主要な各部分（parties）の数と位置が示されてから、付属の各部分の配列（disposition）に取り組む。¹⁸

なんらかの建築物の総体は、数の多寡はあれども部分の集積（l'assemblage）と組み合わせ（la combinaison）の結果でしかなく、またそのようなものとしてしか存在しえない。そして人は自分が自由に使えるものしか集め組み合わせることができない。なんであれ建築物の全体を設計するには、なによりまず、あらゆる建築物の設計に用いるあらゆる部分についての完全な知識を得る必要がある。そのためには、諸部分を検分し、比較し、比較項のなかでの類似点と相違点を見、共通点のあるものと比較した際の固有の特徴を峻別する必要がある。¹⁹

E. カウフマンは、このようなデュランの建築的表現に共通する基本モチーフを「矩形による規則正しい分割」、「矩形に調整された体系の多様な組み合わせ」と整理したうえで、そこに「新しい建築の信条の表現」を見いだしている²⁰。

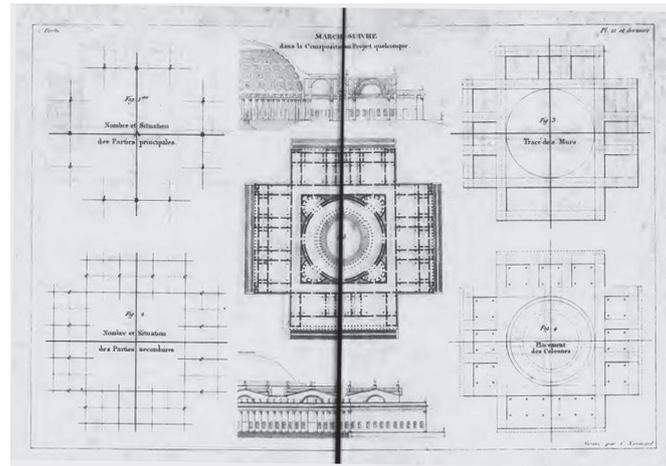


図8 デュラン「スケッチによって着想を固定する方法」、『新版建築講義要録』第1巻、1813年

デュランに先行する時代、すなわち新古典主義時代（啓蒙主義時代）の建築理論は、「何が建築の規範の起源なのか」を主要な論点とし、その起源を模倣することを使命とした。古代ギリシア（ジュリアン=ダヴィッド・ル・ロワ）、古代ローマ（ジョヴァンニ=バッティスタ・ピラネージ）、観念的起源としての「原始の小屋」（マルク=アントワーヌ・ロージェ）、純粋な幾何学形態（クロード=ニコラ・ルドゥ）といった具合である。また、デュランより5歳年長のカトルメールは、建築の理念型たる「^{タイプ}類型」を「^{モデル}範型」とは異なる概念として論じつつも²¹、古代ギリシア建築への評価をいまだに残存させていた。他方でデュランの『比較建築図集』は古今の建築物を取り集めたものであるが、そこでは建築史の「起源」はもはや問題とならない。カトルメールとデュランは、19世紀初頭において建築の類型学を理論化した建築家として共に論じられることが多いが、この点において両者の間には断絶がある（それはとりもなおさず、デュランの新規性でもある）。建築史記述として「起源」へと遡行し、建築術における規範としてその「起源」を模倣するのではなく、相互に等価な関係の「建築物のジャンル」や「建築物の要素」が同一平面上フラットに存在しており、それらは有用性と経済性の原則に従って選択と組合せが可能である——これがデュランの確立した建築史と建築設計の方法であった。建築の認識における、通時的把握から共時的把握への転回と言い換えることもできるだろう。

建築理論書における図表的表現の通時的な変遷については、すでに第1節第2項で言及した。ここでは、デュランによる図表の特徴をなす「均質な平面としての基底」という性質と、そこに体现された歴史認識のあり方をよりよく照らし出すために、隣接する時代の特徴的な作例を挙げておきたい。顕著な例は、G.B.ピラネージ（1720-1778年）である。「カンプス・マルティウスの三枚の地図」【図9】では、大きな地図の上に、異なる時代のカンプス・マルティウスを描いた2枚の地図が不規則に配置されている。各々の地図は端がめくれ上って下部の面を覗かせており、最も大きな地図ですら安定した基底面を提供してはいない。ここでは、異時間的で重層的な古代ローマの都市の記憶が、紙片の積層となって現れている。ピラネージにとっての古代ローマは、異質な要素が剥離しつつ重なり合う、不均質で重層的な場所なのである。同じ版画集に収められた「イクノグラフィア」【図10】では、異なる時代に属する建築要素が、一枚の滑らかな大理石地図の表面を装って取り集められ、配置されている。ピラネージにおいては、独立した建築物の断片や部分が集められるが、それらが均質な方眼状に並べられることはなく、また要素同士の結合も起こり得ない。彼が描き出したのは、多層的で異種混淆的な、偽装された平面である。

デュランの^{タフロー}図表との違いは、明らかであろう。地層の重なり合いにこだわる考古学者ピラネージとは対

照的に、デュランは土地や時代の文脈から建築的要素を引き剥がし、徹底してフラットな方眼の上に、相互がいかなうにも交換可能な要素として並べ置く。そこからは、重層的な記憶の堆積も、単線的でクロノロジカルな時間の流れも捨象されている。I. デ・ソラ=モラレスは、「デュランは歴史に無関心であった²²」とまで推察している。デュランの均質なグリッドを基底面とした形態の比較という方法論は、例えばJ.B.セルー=ダジャンクールによる、複数の美術作品や記念碑的建築物を平坦に並置した「美術史の記述」と共通項をもつであろう。



図9



図10



図11

【図9】 G.B.ピラネージ「キャンパス・マルティウスの三枚の地図」、『古代ローマのキャンパス・マルティウス』1762年

【図10】 G.B.ピラネージ「イクノグラフィア」、『古代ローマのキャンパス・マルティウス』1762年

【図11】 セルー=ダジャンクール『記念物による美術史』1810-1823年

結論

デュランの「^{タブロー}一覧表」を用いた建築の類型学は、建築史記述と建築構想の両面にまたがるものである。この固有の図的表現によって、建築史では時代や地域を離れた「比較」による類型学が、建築構想においては、建築物を等価な要素に分けその組み合わせによってアルゴリズム的に設計を行う方法が可能となった。ここにおいて、建築の歴史は「自然」や「起源」の模倣という軛から解放され、グリッド状に配置された均質で等価な図による視覚的形式の比較へと移行する。デュランによる革新の背景には、建築の歴史に関する認識の変容があるが、彼の生み出した図的表現手法は、この変化を明確に可視化することでさらに加速させるものだった。また、建築設計においては、芸術の領域を離れて手法の標準化がなされ、機能性、合理性、合目的性、^{エコノミー}経済性といった価値の追求へと舵が切られることとなる。そして、このような図的表現による認識の変革の基底をなすのは、(デュラン個人の独創性というよりも) 建築を取り巻く政治制度や権力構造の大変革であった。

先行する新古典主義の建築家(および建築史家・建築理論家)たちとも、ほぼ同世代のカトルメールとも異なり、デュランは二次元平面上の均質な^{グリッド}方眼を比較、分類、分析的思考、そして設計という創造的作業の場とすることで、新たな方法論を生み出した。そこでは、建築の諸要素が最小単位へと分解されるための均質な基底材が前提となっている。

デュランの図表と類型学に基づくアルゴリズム的な手法は、上記のような新しさを持つものであるが、正しい建築のあり方(「建築の真の原理」)を求める彼の姿勢には、いまだ従来の性質も残存している。そして、彼の生み出した建築比較史と建築設計の図的方法論は、やがて彼個人の意図や、ポリテクを中心

とする技術者としての建築家養成の文脈を離れて、19世紀の半ばから後半にかけては、エコール・デ・ボザールを中心に、異なる時代や地域の様式を複数結合させた、キメラのような折衷主義建築——デュランの図的方法論によって排除されたはずの、ピラネージ的な異種混濁性——を帰結させてゆくのである。

【付記】この論文は、2018-20年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究課題「啓蒙主義時代から19世紀前半までのフランスにおける建築図面・図表の思想史的意義」の成果の一部である。表象文化論学会第12回大会（2017年）および第13回大会（2018年）での口頭発表を基とし、その際にコメントーターの岡田温司氏、後藤武氏や会場から寄せられたコメント・質問も踏まえて大幅に加筆修正を行った。

註

- 1 複数の事物を同一平面上に並べて配置する図的表現は、科学技術分野において初期近代に登場したものであり、19世紀には従来絵画を指す語だった「タブロー」が、この種の図表をも示すようになる。ヴェンドラーはこの図表に、ただ事物や要素を並置するだけではなく、それらの間に一定の秩序をもたらしという意義を見出している（Reinhard Wendler, “Thinking with Models: On the Genesis of James Watson’s *Molecular Biology of the Gene*”, Bredekamp et al., *The Technical Image*, 2015, p. 81.）。
- 2 Moneo, “On Typology,” p. 29.
- 3 Moneo, “On Typology,” p. 23.
- 4 グランドゼコール（フランスの高度専門職養成のための高等教育機関群の総称）の一つで、フランス革命後の1794年に技術官僚養成のため設立された。
- 5 もっとも、国家的エリートとしての技術者養成制度そのものは、アンシャン・レジームの頃より整備が進められていた。最初のグランドゼコールであるエコール・デ・ボンゼジョセ（王立土木学校）は、ルイ15世治世下の1747年に設立されている。
- 6 Durand, *Précis*, t. 2, 1805, p. 5. 古代ローマのウィトルウィウス以来の「オーダー」も、デュランは建築の本質ではないとする。彼はM.A. ロージェの建築の元型としての「原始の小屋」概念、およびオーダーにおける「原始の小屋」模倣論も、ウィトルウィウス以来の伝統を持つアントロポモルフィズム（擬人主義）も、ともに批判する。すなわちデュランにおいて、建築は何らかのモデル（理想的な元型、古典古代の建築、人体比例など）を模倣すべしという規範から解放されたのである。
- 7 Szambien, *J-N-L Durand*, p. 27.
- 8 ベヴスナー『建築タイプの歴史Ⅰ』3ページ。
- 9 Durand, *Recueil*, t. 2, page de titre.
- 10 『比較建築図集』でも後年の『建築講義要録』でも、デュランが用いる分類概念は一貫して「ジャンル (genre)」であり、カトルメールとは異なり「類型・型 (type)」の語は使用していない。しかしそこで行われているのは、本稿でも論じる通り「理想的な型」の抽出に他ならず、一連の先行研究（アルガン、モネオ、サンビアン、リナザソロ、ヴィドラー、ヴィラーリ、長尾ら）がこれを類型学 (typologie) とみなしていることは妥当と判断できる。
- 11 Cf. Villari, *J.N.L. Durand*, p.58. また、1821年には付属資料の「建築講義図版編 (*Partie graphique des cours d'architecture*)」が出版されている。本書はその後ベルギーでも数回にわたって刊行され、1831年にはドイツ語訳が出版されて、ドイツの新古典主義建築に大きな影響を与えることとなった。
- 12 Szambien, *J-N-L Durand*, p. 200-201には、第1巻初版（1805）と第1巻改訂版（1813）の比較対象表が掲載されている。
- 13 Durand, *Nouveau Précis*, t. 1, 1813, p. 6. (邦訳15ページ。)
- 14 Durand, *Nouveau Précis*, t. 1, 1813, p. 21. (邦訳17ページ。)
- 15 Durand, *Nouveau Précis*, t. 1, 1813, p. 26-27. (邦訳20ページ。)
- 16 Durand, *Nouveau Précis*, t. 1, 1813, p. 32. (邦訳24ページ。)
- 17 Durand, *Nouveau Précis*, t. 1, 1813, p. 94. (邦訳78ページ。)
- 18 Durand, *Nouveau Précis*, t. 1, 1813, p. 94. (邦訳78ページ。)
- 19 Durand, *Partie graphique*, p. 6.
- 20 カウフマン『ルドゥーからル・コルビュジエまで』86ページ。
- 21 Quatremère de Quincy, *Dictionnaire historique d'architecture*, tome 3, p. 629.
- 22 De Sola Morales, “The Origins of Modern Eclecticism,” p. 127.

主要参考文献

○一般資料

BLONDEL, Nicolas-François, *Cours d'architecture*, 3 vols., Paris : P. Aubouin & F. Clousier, 1675-1683.

<http://architectura.cesr.univ-tours.fr/Traite/Notice/Bnf6k85661.asp>

BLONDEL, Jacques-François, *Architecture française, ou Recueil des plans, élévations, coupes et profils des églises, maisons royales, palais, hôtels & édifices les plus considérables de Paris...*, Paris : Charles-Antoine Jombert, 4 vols., 1752-1756.

- Id., *Cours d'Architecture, ou Traité de la décoration, distribution et construction de bâtiments...*, 9 vols., Paris : Desaint, 1771-1777.
- BOULLÉE, Étienne-Louis, *Architecture, Essai sur l'art*, manuscrit, antérieurs à 1793-1799, textes réunis et présentés par J.-M. Pérouse de Montclos, Paris : Hermann, 1968.
- DURAND, Jean-Nicolas-Louis, *Recueil et parallèle des édifices de tout genre, anciens et modernes, remarquables par leur beauté, leur grandeur, ou par leur singularité, et dessinés sur une même échelle*, 2 vols., Paris : l'imprimerie de Gillé fils, 1799-1801. Gallica. ark:/12148/bpt6k85721q (vol. 1), ark:/12148/bpt6k857222 (vol. 2). [ジャン・ニコラ・ルイ・デュラン『デュラン比較建築図集』長尾重武編、玲風書房、1996年。]
- Id., *Précis des leçons d'architecture données à l'École polytechnique*, 2 vols., Paris : chez l'auteur, 1802, 1805. <https://archive.org/details/prcisdesleon01dura> (vol. 1), <https://archive.org/details/prcisdesleon02dura> (vol. 2)
- Id., *Nouveau précis des leçons d'architecture données à l'École impériale polytechnique*, t. 1, Paris : chez l'auteur, 1813. https://archive.org/details/gri_000133125012233678 [—『建築講義要録』丹羽和彦・飯田喜四郎訳、中央公論美術出版、2014年。(邦訳書には底本の記載が無いが、訳文と照らし合わせると第1巻については1813年の改訂版に、第2巻は初版に依拠していると推測される)]
- Id., *Partie graphique des cours d'architecture faits à l'École royale polytechnique depuis sa réorganisation ; précédée d'un sommaire des leçons relatives à ce nouveau travail*, Paris : L'auteur etc., 1821. <https://archive.org/details/partiegraphiqued00dura>
- LEDOUX, Claude-Nicolas, *L'Architecture considérée sous le rapport de l'art, des mœurs et de la législation*, Paris : chez l'auteur, 1804. (fac., Nördlingen : Verlag Dr. Alfons, 1987.) [クロード=ニコラ・ルドゥー『クロード・ニコラ・ルドゥー「建築論」註解』白井秀和訳・解説、中央公論美術出版、1994年。]
- LE ROY, Julien-David, *Histoire de la disposition et des formes différentes que les chrétiens ont données à leurs temples, depuis le règne de Constantin le Grand, jusqu'à nous*, Paris : Desaint et Saillant, 1764. Gallica. ark:/12148/bpt6k6472530k
- PEYRE, Marie-Joseph, *Œuvres d'architecture de Marie-Joseph Peyre, Nouvelle édition, augmentée d'un Discours sur les monumens des anciens comparés aux nôtres et sur leur manière d'employer les colonnes*, Paris : l'éditeur (Panckoucke), 1795. Gallica. ark:/12148/bpt6k856939
- QUATREMÈRE DE QUINCY, Antoine-Chrysostome, *Encyclopédie méthodique : architecture*, Paris : Panckoucke, 1788-1825.
- Id., *Dictionnaire historique d'architecture : comprenant dans son plan les notions historiques, descriptives, archéologiques... de cet art*, 2 vols., Paris : A. Le Clère et Cie, 1832. Gallica. ark:/12148/bpt6k1045594m
- SEROUX D'AGINCOURT, Jean-Baptiste-Louis-Georges, *Histoire de l'Art par les Monumens, depuis sa décadence au IV^e siècle jusqu'à son renouvellement au XVI^e*, 6 vols., Paris : Treuttel & Würtz, 1810-1823.
- 二次資料
- ARGAN, Giulio Carlo, "Sul concetto di tipologia architettonica," in *Progetto e destino*, Milan: Il Saggiatore, 1965. [ジュリオ・カルロ・アルガン「建築類型学という概念について」横手義洋訳、『10+1別冊 漢字と建築』INAX出版、2003年、195-199ページ。]
- BREDEKAMP, Horst, et al., *The Technical Image: A History of Styles in Scientific Imagery*, Chicago: The University of Chicago Press, 2015.
- DE SOLA-MORALES, Ignasi, "The Origins of Modern Eclecticism: The Theories of Architecture in Early Nineteenth Century France," in *Perspecta*, vol. 23, 1987, pp. 120-133. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/1567112.
- FOUCAULT, Michel, *Les mots et les choses*, Paris : Gallimard, 1966. [ミシェル・フーコー『言葉と物：人文主義の考古学』渡辺一民・佐々木明訳、新潮社、1974年。]
- Id., *Surveiller et punir : naissance de la prison*, Paris : Gallimard, 1975. [—『監獄の誕生：監視と処罰』田村俣訳、新潮社、1977年。]
- KAUFMANN, Emile, *Architecture in the Age of Reason: Baroque and Post-Baroque in England, Italy, and France*, Harvard University Press, 1955. [エミール・カウフマン『理性の時代の建築』全2巻、白井秀和訳、中央公論美術出版、1997年。]
- Id., *Von Ledoux bis Le Corbusier: Ursprung und Entwicklung der autonomen Architektur*, Wien: Dr. Rolf Passer, 1933. [—『ルドゥーからル・コルビュジエまで』白井秀和訳、中央公論美術出版、1992年。]
- LINAZASORO, José Ignacio, *Le projet classique en architecture*, trad. par Claude Duport, Bruxelles : Archives d'Architecture Moderne, 1984. [éd. orig., *El proyecto clásico en arquitectura*, Barcelona: Gustavo Gili, 1981].
- MALLGRAVE, Harry Francis, *Modern Architectural Theory: A Historical Survey, 1673-1968*, Cambridge University Press, 2009. [H. F. マルグレイト『近代建築理論全史 1673-1968』加藤耕一監訳、丸善出版、2016年。]
- 松井健太 (口頭発表)「アルド・ロッシ『都市の建築』(1966)の同時代的背景：ヴェネツィア建築大学「建物の配列的特徴」講座(1963-66)の検討」、建築史学会大会、2017年4月15日、神奈川県庁本庁舎。
- 松政貞治『パリ都市建築の意味-歴史性：建築の記号論・テキスト論から現象学的都市建築論へ』中央公論美術出版、2005年。
- MONO, Rafael, "On Typology," in *Oppositions*, No. 13, 1978, pp. 22-29.
- 大島哲蔵「タイポロジー：アルド・ロッシからドナルド・ジャッドまで」、『10+1』No.29、2002年、pp.181-191.
- 小澤京子『都市の解剖学：建築／身体の剥離・斬首・腐乱』ありな書房、2011年。
- 『ユートピア都市の書法：クロード=ニコラ・ルドゥーの建築思想』法政大学出版局、2017年。
- 白井秀和「フランス啓蒙主義におけるティップとスタイル」、『日本建築学会論文報告集』第345巻、1984年、158-166ページ。
- SZAMBIEN, Werner, *Jean-Nicolas-Louis Durand, 1760-1834, De l'imitation à la norme*, Paris : Picard, 1984.
- VIDLER Anthony, "Architectural Cryptograms: Style and Type in Romantic Historiography," in *Perspecta*, vol. 22, 1986, pp. 136-141. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/1567100.
- VILLARI, Sergio, *J.N.L. Durand (1760-1834): Art and Science of Architecture*, N.Y.: Rizzoli, 1990.

小澤 京子 (和洋女子大学 人文学部 日本文学文化学科 准教授)

(2018年10月12日受理)